

『中国古典名劇選 III』

後藤裕也*・田村彩子**・陳駿千***・西川芳樹****・林雅清*****編訳、
東方書店、2022 年

上 原 究 一†

本書は明の臧懋循（^{ぞうぼうじゆん}？～1620 前後）が編集した『元曲選』という書物に収められている全 100 編の雜劇のうち、10 編を翻訳した選集である。書名に「III」と付いている点から察せられる通りシリーズの 3 冊目に当たり、1 冊目の後藤裕也・西川芳樹・林雅清編訳『中国古典名劇選』（東方書店、2016 年；便宜上以下「I」と称す）と 2 冊目の後藤裕也・多田光子・東條智恵・西川芳樹・林雅清編訳『中国古典名劇選 II』（東方書店、2019 年；以下「II」と称す）も、それぞれ『元曲選』から 10 編を選んで翻訳したものであった。

……という紋切り型の紹介をしたところで、結局どういう本なのかは、おそらく中国文学にかなり詳しい方にしか伝わらないだろう。『元曲選』はもとより、雜劇というジャンル自体が、悲しいかな日本では知名度が低いからだ。雜劇というのは、金代の終わり頃に現在の北京市や河北省の辺りで興り、元代に隆盛を極めた演劇ジャンルで、歌曲と台詞からなる歌劇である。1 編の雜劇は 4 つの組曲で構成されるのが原則で、組曲ひとつ分の長さも概ね決まっているため、基本的に短編となる。歌うのは 1 人の主役だけに限るという縛りがあって、他の出演者は台詞はあっても歌は担当しなかった。歌われたのは当時流行していた「曲」という種類の韻文で、この「曲」は元代に流行したため、特に「元曲」とも呼ばれる。そして、「元曲」は「曲」を指すだけではなく、雜劇それ自体の別称としても定着した。この雜劇の傑作選として 100 編を集め、読み物として編集した上で、明も終わりに近づいた 1616 年に刊行されたのが『元曲選』である。

元代の雜劇はテキストが現存する範囲では中国最古の本格的な演劇であり、白話文（中国語の口語体の文章）で書かれた文学作品としても初期のものであるため、中国文学史の上では唐代の詩や宋代の詞、更には明代・清代の白話小説と並んで、時代を代表するジャンルとして重視されている。ところが、唐詩や明清の白話小説が盛んに翻訳出版されているのに対して、元雜劇の邦訳はこれまであまり進んでいなかった。1920 年代に東京帝国大学の塩谷温氏の率いるグループが『元曲選』全

* 目白大学外国語学部准教授

** 立命館大学孔子学院中国語講師

*** 河南師範大学文學院講師

**** 関西大学、福井県立大学、大手前大学非常勤講師

***** 京都文教大学こども教育学部准教授

† 東京大学東洋文化研究所准教授

uehara91@ioc.u-tokyo.ac.jp

編の訳稿をいったん完成させてはいたが、それは現代語訳ではなく訓読調のものだったし、訳稿を整理して実際に出版されたのは僅か数編に終わっている¹。その後も何編かの雑劇を翻訳した選集は幾つか出版されているが、『元曲選』の全訳が試みられることは長らくなかった。そんな状況を打破して『元曲選』全編の現代語訳が達成されれば大変な偉業であるし、100編のうち30編を訳したばかりの現時点でも、本シリーズは既に本邦最大の雑劇の翻訳書となっている。

『元曲選』に収める100編の雑劇は、明代の人の作品も少しだけ含まれているものの、大多数は元代の作品で、『元曲選』に収録される形でしかテキストが伝わっていない作品も少なくない。ただし、元代に出版された本が残っている作品や、明代の写本や刊本が『元曲選』以外の形でも残っている作品では、『元曲選』のテキストは多くの場合かなり大幅な整理改編を受けていることが確かめられる。なんと、話の展開や結末が変わっていることさえ珍しくないのだ。また、演劇であるからには当然のことながら、当時の口語語彙が多用されており、今となっては難解な語が多い。そのため、さほど多くはない既存の翻訳書の中には、諸本間の異同を詳しく掘り下げ、難解な口語語彙も集められる限りの用例を挙げた上で考証した結果、1編の雑劇だけで300頁前後に及ぶ1冊を丸ごと費やしているものが複数ある（吉川, 1943; 1948; 赤松ほか, 2014 など）。

そうした詳細な訳注は、その時々最新の研究成果を伝えるものとして、もちろん非常に重要である。しかし、専門の研究者でも読むのに時間の掛かるそのような訳注は、雑劇の魅力を多くの読者に伝えることには、どう考えても向いていない。その点、本シリーズはあくまで『元曲選』の翻訳なのだと割り切っていて、他のテキストが伝わっている作品でもそれらとの相違点には基本的に触れずに、1編あたり訳注も含めて40頁前後でスッキリとまとめている。とはいえ、伝統詩文や歴史書から他の雑劇作品や民間伝承の類まで多岐にわたる典故や人名にはツボを押さえた注がきちんと附されていて、説明すべきことは概ね説明してくれている。翻訳対象の『元曲選』という書名を敢えて表に出さずに「中国古典名劇選」と銘打って出版したのは、この方が一般の読者の手に取られやすくなり、元の時代にこのようなお芝居があったことを知ってもらえるのではないかと狙いによるそうだが²、確かにその狙いに即した読みやすい翻訳が心掛けられているのだ。本書の構成は以下の通りとなっている。

はしがき

凡例

一、李太白、匹配となる金銭の記〔金銭記〕

二、銭大尹、智をもって謝天香を寵しむ〔謝天香〕

コラム①——元雑劇の名脇役～「店小二」と「張千」～

三、凍える蘇秦、錦を衣て郷に還る〔凍蘇秦〕

四、龐涓、夜に走る馬陵道〔馬陵道〕

コラム②——メディアミックスと「馬陵道」

五、劉晨と阮肇、誤らずも桃源に入る〔誤入桃源〕

¹ なお、この手書きの訳稿は東京大学東洋文化研究所が所蔵しており、近いうちに全冊のデジタル画像を公開する予定がある。

² 2019年3月16日に中国古典小説研究会2018年度関東例会で行われたシンポジウム「中国古典白話文芸の再生～翻訳・翻案の歴史・現状・展望～」の席上での林氏の発言による（中国古典小説研究会編, 2021）。

六、張天師、風花雪月を断く〔張天師〕

コラム③——伝統的な春の節句「清明節」

七、女の楊氏、狗を殺して夫を勧す〔殺狗勸夫〕

八、包待制、智をもって生金閣を賺す〔生金閣〕

コラム④——庶民のヒーロー、名裁判官「包公」(その一)

九、楚昭王、疎き者より船を下ろす〔楚昭王〕

十、便宜行事の虎頭牌〔虎頭牌〕

コラム⑤——庶民のヒーロー、名裁判官「包公」(その二)

あとがき

「はしがき」「凡例」「あとがき」はいずれも1～2頁、コラムは2～4頁、各編の末尾に付される解説も1～2頁と短くまとめられており、さらりと読めるだろう。各劇の題名を訓読調で記している点がとっつきにくく感じられる向きもあるかもしれないが、本書では訓読調になっているのは各劇の題名だけであり、劇中でしばしば引用される経書の一節や詩のような訓読に適した箇所でも訓読は避けて、平易な現代語訳に徹しているので安心されたい。その一方で、主役が歌う曲の部分は意識的に七五調に寄せて訳してあり、歌劇である原典の雰囲気や伝わるような工夫もされている。なお、訓読調の題名の後に〔 〕に入れて示されているのが題名の略称で、雑劇はこの略称で呼ばれるのが通例となっている。

本書収録の諸編は、「金銭記」と「謝天香」は才子が佳人と結婚するまでの顛末を描いた恋愛物、「凍蘇秦」「馬陵道」「楚昭王」は歴史物、「誤入桃源」と「張天師」は天界の神々や仙女の登場する話、「殺狗勸夫」は世話物で、「生金閣」は裁判物、そして「虎頭牌」は女真族の作者が女真族の武将を主役に据えて描いた外来語満載の異色作と、バリエーションに富んでいて読者を飽きさせない。父と兄を無実の罪で殺された春秋時代の伍子胥の復讐が背景にある「楚昭王」、「龐涓この樹の下に死す」で有名な戦国時代の孫臏と龐涓の戦いを描いた「馬陵道」、こちらも戦国時代の縦横家として名高い蘇秦と張儀を描いた「凍蘇秦」の歴史物3編はいずれも『史記』の載せる有名な話を下敷きに創作されているが、他にも「金銭記」には盛唐の大詩人李白、「謝天香」には宋代に流行した韻文の一ジャンルである詞の名人の柳永、「生金閣」にはコラム2本を割いて詳しく紹介してくれている北宋の名裁判官の包拯など、実在の有名人が登場して彩りを添えている。

文才に富んだ妓女を主役とする「謝天香」には、柳永の詠んだ詞を歌い聞かせるように地方長官の銭可から命じられた主役の謝天香が、その詞で最初に押韻する字が「可」であったため、目上の相手の本名を目の前で口にする禁忌を犯さないように押韻する字を全て変え、それでいて句ごとの大意は変わらないようにしながら即興で歌う、という実に翻訳しづらい名場面がある。本書では柳永の原作が示される際には押韻する句を「^{うわのそら}可^や可^わ」「寝転んだまま」「届かぬ沙汰」などア段の音で終わるように訳し(55頁)、謝天香が字句を変えて歌う際には押韻する句を「^や已^わ已^な」「目覚めぬ眠り」「届かぬ便り」などイ段の音で終わるように訳す(60頁)、という形でこれを乗り切っている。最初の「^{うわのそら}可^や可^わ」と「^や已^わ已^な」だけは原文の文字をそのまま使ってルビで意味を示しているが、これは謝天香が押韻する字を咄嗟に変えたこと、及びその理由を明示するためである。また、「虎頭牌」で幾つか使われている北方民族の言語由来の語彙は、「^{サートゥン}親戚」(原文は「撒敦」)や「^{イエラー}兵士」(原文は「曳刺」)のように漢字で意味を示した上でカタカナのルビで原文の現代中国語での発音を示すことによ

て、エキゾチックな雰囲気を感じた外来語であることを表現している。このようにルビを最大限活用して訳している点は、本シリーズの特徴のひとつだと言えよう。

本シリーズについてもうひとつ特に記しておくべきは、主として合宿形式で行われた読書会の成果だということである。「I」から一貫して編訳者に名を連ねている後藤氏・西川氏・林氏の3人は関西大学で井上泰山氏に学んだ同門の間柄で、在学中から井上氏のもとで定期的に合宿形式で雑劇を読む手ほどきを受けていたという。井上氏の還暦を記念してこの3人による合宿形式の読書会での成果をまとめたのが「I」で（「I」「あとがき」）、「II」は上記3氏に同門の多田氏と東條氏もメンバーに加わった成果（「II」「あとがき」）、本書はやはり上記3氏に同門の陳氏と、他大学の出身ながら自身の研究テーマに直結する「馬陵道」の読書会にぜひ参加したいと申し出たという田村氏とが加わった成果であるとのことだ（本書「あとがき」）。各編について下訳を作成した担当者が誰であるかは各冊の「あとがき」に示されているものの、各編の文責は全てその冊の編訳者として挙がっている3人ないし5人の全員に帰するものと明言されている。会読の成果としての翻訳だという点を重視しているのだろう。

井上氏には現存する三国志物の雑劇を全て翻訳した『三国劇翻訳集』³という著書があり、その「あとがき」によると、井上氏もまた学生時代から合宿形式や毎週開催形式の読書会で雑劇を読む経験を重ねられたそうである。また、前述の詳細な訳注を備えた翻訳書各種も、いずれも大勢の専門家による読書会の成果物であった。雑劇は難解な箇所が多く専門家でも一人ではなかなか取り組み難い一方で、1編あたりの分量が長すぎも短すぎもしない適度な分量であるため、読書会形式で読み進めるのに向いており、それが長年の伝統になっているのだ。

その読書会も本書では新型コロナウイルス流行の影響によってオンライン開催に変わったとのことだが、いまや本シリーズには、コロナ前からの読書会文化の伝統を絶やさずにコロナ後へと繋いでいくという意義も生じているのではないだろうか。田村氏が参加を申し出たのを受けて当初は24年後に読む予定だった「馬陵道」を前倒して本書に収めることになったとのことなので、編訳者諸氏は『元曲選』100編の全訳を目指して長期計画で本シリーズに取り組んでいるようだ。「I」の刊行時には30代後半から40代前半だった後藤氏・西川氏・林氏が定年を迎えるかどうかくらいの時期に完結しそうなペースであるから、3氏にとってはまさしくライフワークになるはずだし、完結までにはきっと新たなメンバーが何人も加わることだろう。その中には本シリーズによって雑劇の魅力を知った読者もいるかもしれない。もしかすると、それこそが編訳者諸氏の密かな望みなのではあるまいか。まだまだ先は長いようだが、本シリーズの順調な展開を願ってやまない。

参考文献

赤松紀彦・金文京・小松謙・佐藤晴彦・荀春生・高橋繁樹・高橋文治・竹内誠・土屋育子・松浦恆雄編（2014）『元刊雑劇の研究（三） 范張鶏黍』汲古書院。

井上泰山訳（2002）『三国劇翻訳集』関西大学出版部。

後藤裕也・西川芳樹・林雅清編訳（2016）『中国古典名劇選』東方書店。

後藤裕也・多田光子・東條智恵・西川芳樹・林雅清編訳（2019）『中国古典名劇選Ⅱ』東方書店。

中国古典小説研究会編（2021）「2018年度関東例会シンポジウムトークセッション：セッション① 新しい日本語翻訳がもたらす白話小説受容の新時代」『中国古典小説研究』第23号、60頁。

吉川幸次郎（1943）『元曲金銭記』筑摩書房。

———（1948）『元曲酷寒亭』筑摩書房。

³ 井上（2002）。本書が出るまではこれが最も多くの雑劇の日本語訳を取めた本であった。